

越山若水

2021.7.27

日本資本主義の父・渋沢栄一を

主人公に、幕末から明治の動乱期を描いたNHK大河ドラマ「青天を衝け」。徐々に佳境を迎えるところ

で東京五輪・パラ大会のため

中断している▼それはさておき、ドラマを見て

思ったことがある。世界の列強の圧力と近代化の波が押し寄せる激動の時代とはいえ、

日本人の変わり身の早さにびっくり。日本の

国を守るといふ大義に納得すれば、さほど抵抗

もなく臨機応変に路線変更する国民性にも

目を見張った▼実際の話として、「詳説日本

史研究」(山川出版社)には当時の福井藩の

エピソードが紹介されている。藩校・明新館

で物理や化学を教えていた米国人教師グリフ

イスは、廃藩置県を通告する使者が到着した

とき、藩内に大きな動揺が起こったことを書

き残している▼しかし一方で、知識ある藩士

たちは異口同音に「これは日本のために必要

なこと。これからの日本は米国や英国の仲間

入りができる」とまさに意気揚々と語ったと

いう。進歩的かつ開明的な考え方へと見事な

切り替えである(「齋藤孝のざっくり日本

史」祥伝社)▼齋藤さんはこの歴史事実をこ

う読み解いている。「日本の近代化が成功し

たのは、優先順位を間違えなかったから」。

自分たちの藩より国家のことを思う大局観。

政治であれ、ビジネスであれ、はたまた個人

的な行動であれ、模範としたい信念である。